

〔研究ノート〕

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興

— Walkers are Welcome タウンの活動 —

塩 路 有 子

はじめに

英国におけるパブリック・フットパス (Public Footpath, 以下フットパス) は, 18世紀の囲い込み以前から存在し, 現在は「歩く権利」(Right of Way) が法的に認められている公共の自然道である (平松 1999, 2002)。19世紀末以降, 英国では民間の環境保護運動が活発化し, カントリーサイドなどにおいて自然環境の保全が行われてきた。人々は日常的に自然と触れ合いながら, その環境を維持管理してきた。それを可能にしているのが, 英国内に網目状に広がるフットパスである。

英国には, 国指定の長距離フットパス「ナショナル・トレイル」だけでも15本あり, 全長約3,800kmに及ぶ。一方で, 地方や市町村にも大小さまざまなフットパスがある。英国人が数世紀にわたって発展させてきたフットパスは, それ自体が人と自然を結ぶ文化遺産といえる。現在, フットパスをめぐるのは, 歩く人々だけでなく, それを維持管理する住民や民間団体, フットパスによって地域の活性化を推進しようとする住民グループや行政など, 自然環境の維持管理に加えて, 人的ネットワークを含む文化・社会的環境が構築されている。

本稿では, このような英国の環境において, フットパスを活用してウォーカーを誘致することで地域の活性化を目指す全国組織であるWalkers are Welcome (以下WaW) 協会を取り上げる。同協会は, 2007年の発足以降, 成長と発展を続けている。本研究では, 2015年8月に実施した現地調査にもとづいて¹⁾, 同協会の設

立経緯と目的, 活動地域について述べる。さらに, 同協会に承認されたWaWタウンの中で, 地域振興に成功している5つの町における活動と現状について報告し, 英国におけるフットパスと地域振興の関係について考察する。

I. WaW協会について

1. WaW協会の設立経緯

北部イングランドに位置するヘブデン・ブリッジ (Hebden Bridge, 以下HB) は, 英国で最初のWaWタウンであり, WaW概念はこの町で生まれた。同町の人口は約7,000人, 周辺の小さな村を含めて9,000人ほどが住む, 丘陵の裾野に広がる地帯である。

産業革命以前, この地域の人々は丘の上で羊を飼い, 羊毛を売って生活していた。しかし, 産業革命後, 綿工場が丘の下の谷間に次々と建設されると人々は工場で働くために, 徐々に丘の下に暮らすようになり, 現在のHBの町が形成された。この町は, 当時隆盛し, その後衰退した北部イングランドの典型的な工業地帯の一つである。

HBでWaW組織を設立に導いたのは, アンドリュー・ビビィ (Andrew Bibby) という, 当時HB在住10年目のジャーナリストである。ビビィ氏が2006年4月24日に提示した「HBを最初の公式認定のWalkers Welcomeタウンにするための提案」には, 彼がこのWaW概念をフェアトレード・タウンの概念²⁾から着想したことが述べられている。その背景として, 既存の市場経済とは異なるルートや基準で開発途上国の

製品を流通させるというフェアトレードの概念とWaW概念が類似しているからだと考えられる。集客を考える上で、既存の主要な観光市場に頼るのではなく、ウォーキングやウォーカーという少数派で目立たない存在に注目することで地域振興に導くという点である。

ビビィ氏は、フェアトレード・タウンに必要な5つの条件³⁾を参考にして、WaWタウンとして公式認定を得るために次の6つの条件を挙げている。これらは現在もWaWタウン認定のさいの基準になっている。

- (1) 同コンセプトに対して多数の地元支援を得ているという表明。多数の地元住民の署名、小さな村では50、HBのような小さな町では250、より大きなコミュニティでは500の署名。
- (2) 地元行政によるWaWステイタス申請への公式認可。地元行政(単一の地域議会とともに、または町議会)によって支援に関する決議を通すことによって表明できる。また、Walkers Welcomeタウンのやるべきことに対する責任をスタッフや委員会メンバーに割りあて、少ない予算をつける。
- (3) 歩く権利を良い状態で維持していることを保証するための行動。地元行政とともに、またはボランティア団体が、教区内のすべての道を少なくとも年に1回は歩いて、障害物を迅速に取り除き、地元行政がその範囲とする地域のすべての道を‘Use Your Paths Initiative’(あなたの道を使う構想)に登録することを、確実にするよう関与する。
- (4) WaWステイタスに対する適切なマーケティング。メディアによる報道、町の中心部で一般の訪問者にできそうなウォークを提案する標識や地図。町の中心部から出発する、道標がある少なくとも2つのウォーク。配布可能なパンフレットの準備。地元商店にWalkers Welcomeステッカーをディスプレイするよう奨励する。
- (5) 公共交通機関を使ったウォーキングの奨励。マーケティング用のパンフレットに公共

交通機関についてわかりやすく説明する。

- (6) WaWステイタスを維持している場所としてのメカニズムの表明。地元のWalkers Welcome 推進グループの招集。

こうして、2007年2月18日にWaW協会が結成された。同年の10月21日には、HBに全国から28人が集まり⁴⁾、事実上の最初の全国的なWaW協会の集会‘Where Walkers are Welcome’が開催された。参加者リストには、ビビィ氏を含めてHBから3名が出席している。講演者として、自然環境に関する政府のアドバイザー機関である非省庁公共機関ナチュラル・イングランド(Natural England)から1名、ヨークシャー・デイルズ国立公園(Yorkshire Dales)から1名、フェアトレード・タウン組織から1名の計3名が招かれている。さらに、最初のフェアトレード・タウンであるガースタンから1名。その他に、イングランド全土から行政の代表者(町やコミュニティ、教区レベル)4名、観光関係の団体2名、ウォーキング・フェスティバルの代表2名、各地のランブラーズ協会(Ramblers Association)⁵⁾3名などの名前が並んでいる。

2. WaW協会の現状

WaW協会のホームページによると、同協会の目的は、次の6点を実現するために町や村を奨励し支援することである。

- (1) ウォーカーにとって魅力的な目的地にするために、その地域のウォークに関する最良の情報を提供する。
- (2) 地域の人々と訪問者に、彼らの地域内で最良のウォーキング機会を提供する。
- (3) ウォーカーにとってのフットパスや施設が、うまく維持、改良、標識されていることを保証する。
- (4) 地域の観光計画と再生戦略に貢献する。
- (5) ウォーキングによる健康効果を促進し、参加者を増やす。
- (6) 公共交通機関の利用を奨励する。

Mar. 2016

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興

上述したWaW概念とその目的に同意する市町村のうち、WaWタウンの認定基準をクリアした所が、WaWタウンとして公式に認定される。2007年のWaW協会設立当初、23市町村が参加したが、その後、認定タウン数は増え続けている。2015年10月末現在、英国内の116の市町村がWaWタウンとして承認されている。その内訳は、イングランド83(南イングランド地域29, 中央イングランド地域25, 北イングランド地域29)であり、スコットランド9, ウェールズ24である。

本稿では、次にWaWタウンの事例として、南イングランド地域からコッツウォルド特別自然景観保護地域(Area of Outstanding Natural Beauty, AONB)⁶⁾内に位置するウィンチコム(Winchcombe)とダースレイ(Dursley), 中央イングランド地域からロス・オン・ワイ(Ross-on-Wye), 北イングランド地域からHB, ウェールズからチェプストウ(Chepstow)の5カ所を取り上げる。

WaW協会の全国組織は、全国のWaWタウンからの5人の代表によって運営されている。次に述べるウィンチコム, ロス・オン・ワイ, チェプストウのWaWグループには、それぞれ全国組織の理事を務める人々が所属している。

II. WaWタウンの活動事例

1. ヘブデン・ブリッジ

2007年に、町を活性化させるためにWaW概念を打ち出し、英国最初のWaWタウンとなったHBだが、最近では英国のテレビ放送で同町が度々舞台になることがあり、ここ5年ほどで観光客が急増したという。そのため、現在では、町の中心部は観光地化されており、かつて工業地帯だった町が最初のWaWタウンとしてウォーカーを誘致して成功したというよりは、むしろ観光市場において成功したかのように見える。

HBでこのWaW活動を促進する組織は、「HBウォーカーズ・アクション・グループ」(Walkers

Action Group, 以下WAG)である。同グループは、2007年に結成された。現在も、メンバーリストには多くの名前があるが、実際に活動しているのは10人程度のメンバーだという。WAGはウォークを組織したりはしないが、WaW活動を促進する役割を担っている。例えば、2015年には英国最初のナショナル・トレイルであるペナン・ウェイ(Pennine Way)の50周年を祝して、町から丘をのぼりペナン・ウェイの一部を歩いて町に戻る新しいサークル・ウォークのルートを生み出した。WAGの副委員長は、27年間HBに住む公務員で、2004年から仕事で香港に6年間暮らしたこともあり、香港でもよくフットパスを歩いたという。彼は、休みには国内外の長距離トレイルを歩くため、他のフットパスとHBのものを比較し、HBのフットパスの良さも認識しており、HBのフットパス・ルートに精通している。また、WAG事務局を担当する女性は、26年間HBに住み、行政で子供の福祉に関わる仕事をしていたが、数年前に退職し、WAGに入った。彼女は、全国組織であるランブラーズ協会会員でもあり、同協会の創始者の行動や理念に強く共感している。現在のフットパスの存在と、それを歩くことができるのはそういった先駆者による努力があったからだと言語。そのほかに、WAG委員の中には、丘の上に近い小村に16年間暮らしている町議会議員もおり、自然環境や地域の発展に関して行政の立場からアプローチしている。

一方で、HBには、WAGができる以前から、地域の活性化に熱心に取り組む住民団体が存在している。2001年に発足した「HBパートナーシップ」というグループは、町の30ほどの社会的あるいは娯楽的なグループから成り、より良い地域づくりを目指す団体である。その背景には、政府の経費削減により地元行政が十分機能していない状況があるという。2001年、HBパートナーシップは、HBのコミュニティとボランティア組織(環境団体、スポーツ団体、芸術団体、若者組織、障害者コミュニティ)、ビジネス・コミュニティ、カルダーデール行政府、

ヘブデン・ロイド町議会と4つの小教区議会の代表たちによって立ち上げられた。2013年には、住民と交渉や相談をして作成したアクションプラン『2020 Vision』も出している。元シェフィールド大学教員で、WAGメンバーでもあるHBパートナーシップ委員長によると、彼らは、現在、地域行政とビジネス・コミュニティがWaWタウンとしての同町に対して責任を果たすように、再び取り組みを開始しているという。HBの住民団体には、その活動の根底に、地域行政に頼らずに住民自身の手で地域の活性化に取り組もうとする自治意識の強さが見られる。

HBにはペナン・ウェイをはじめとする多くのフットパスがあるが、住民の中にはそれらに関わる維持管理団体も存在する。例えば、「CROWS」(黒い鳥のマーク)と呼ばれるコミュニティの歩く権利を支える(Community Rights of Way Service)グループである。これは、ボランティアによる保全団体で、サークル・ウォークであるカルダーデール・ウェイ(Calderdale Way)⁷⁾を維持管理している。HBのWAGの現委員長がこのCROWSも組織している。

このように、現在、WAGの活動メンバーには、HBのフットパスに精通する人物やフットパスとウォーキングの理念に詳しい人、行政議員、HBパートナーシップやCROWSを組織する代表者が入り、HBを再びWaWタウンとして周知させるために活動しているといえる。HBでWaW活動に取り組んでいる人々は、かつてフットパスをめぐって地主と対立したイングランド北部の労働者⁸⁾とは異なり、多様な仕事や経験、考えをもつ人々である。しかし、同地域に育まれている、そうした「歩く権利」やフットパスに対する真摯な姿勢、さらに自立的な自治意識が、HBにおいてWaW活動を生み出し、現在も継続させている背景にあるのかもしれない。

2. ウィンチコム

イングランド南西部に広がるコッツウォル

ズ地域北部に位置するウィンチコムは、人口約5,000人の町である。ウィンチコムは、ヘンリー8世とゆかりのあるスーダリー城のある町として知られているが、観光客は城にのみ訪れ、町を散策することは少ない。一方で、同町にはナショナル・トレイルであるコッツウォルド・ウェイ(Cotswold Way)をはじめ、グロースターシャー・ウェイ(Gloucestershire Way)など、大小多くのフットパスが通っており、歩く環境にはかなり恵まれている。2000年以降、町のパブや商店が次々と姿を消していたが、2009年にWaW協会に登録したことで変化が生まれた。

WaW協会の現理事であるシーラ・タルボット(Sheila Talbot)氏は、同町に1980年代に家族と移住した。彼女は、現在ナチュラル・イングランドでナショナル・トレイル担当の仕事をしているが、2000年以降、ウィンチコムの商店が次々と閉店し、町が閑散としていく様子を危惧し、2009年に町議会においてWaW概念とWaWタウンについてウィンチコムの可能性を提案した。同議会で多くの町議会議員の賛成と協力を得て、町から準備金が出されることが決まり、WaWタウンに向けてのワーキング・グループが結成された。

タルボット氏を中心とするWaW活動グループは、既存のフットパスを活用しながら、町の中心部に必ず戻ってくる周遊型のウォーキング・ルートであるウィンチコム・ウェイ(Winchcombe Way)を考案し、そのウォーキング・マップを作成した。さらに、それらをウィンチコムのWaWのウェブサイトに掲載した。これがきっかけとなり、町を訪れるウォーカーが増加し、町のパブやホテル、商店が活気を取り戻した。

この変化に伴って、住民自身もウォーキングに関心をもつようになり、自らの町の自然環境に目を向けるようになったという。いまでは、町議会だけでなく、町に住む行政議員も活動を支援し、町の観光案内所やボランティアガイド、ウィンチコム友の会などの町の保全団体もフットパスによるまちづくりに協働している。

Mar. 2016

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興

毎年開催するウォーキング・フェスティバルは、参加費が一人5 ㎍だが、年々参加者が増え、大盛況だという。

現在、ウィンチコムには、WaW 認定タウンのステッカーが貼られた店や宿泊施設が多く見られ、WaW タウンであることが住民の間で共有されている状況がわかる。一方で、この町には宿泊施設が少ないという問題点があるが、ホワイト・ハート・イン (White Hart Inn) では、ウォーカー用の部屋ということで少し安い設定がされている部屋も多い。同施設では、ウォーキングの季節である5月から10月には宿泊客の大半がウォーカーだという。宿泊客は世界中から訪れており、日本からのウォーキング・グループも来年の5月の予約を今年の夏に入れたという。

また、WaW タウンのステッカーが貼られた店には、ウォーキングブーツで入店しても問題はないことが約束されており、そのような店内にはウォーカー向けの情報が壁に貼ってあったり、ウォーキング用の地図を販売したり、食料品店にはウォーキングのさいに必要な水や食べ物ショーウィンドウに並んでいる。

3. ダースレイ

ダースレイは、人口約6,500人の町で、19世紀末から20世紀初頭にはエンジンや自転車などの産業技術で栄えた町である。町の中心部には、ヘリテージ・センターなどの施設があり、町を歩くタウン・ウォークを通してこの町で同産業が隆盛した歴史を知ることができる。一方で、町の背後には地元のトラストによって維持管理されている丘陵があり、ゴルフ場を併設しているが、その中にフットパスが通っており、眺望の良い珍しいルートとなっている。

ダースレイは、2013年9月に承認された比較的新しいWaW タウンである。2012年に、同町で初めてウォーキング・フェスティバルを開催したが、20人から30人ほどが訪れただけだったという。しかし、年々参加者は増加しており、2015年10月には4度目を開催する予定である。

ダースレイのウォーキング・フェスティバルは、参加無料で、地元の子供達をフェスティバルに招く取り組みを行っている。同町のWaW グループは、他にも多くの社交的なイベントを開催している。例えば、夏にはクイズ大会を行い、商店の窓でパズルトレイルをしたり、その後、紅茶と焼き菓子を教会の協力で提供するというイベントである。焼き菓子は地元のボランティアが手作りし、2.50 ㎍で提供する。このようにして得た収入はWaW 活動を促進するための資金としている。ダースレイのWaW グループはウォークを実施するだけでなく、地元の人々も参加できるイベントを行っている。

ダースレイのWaW グループは12人のメンバーで構成されており、メンバーには同地域のランブラーズ協会に入っている者もいる。さらに、メンバーには元教員や医師など、知識階級の人々がみられる。同町のWaW グループは、地元のバス会社と提携してウォークを開催している。8月22日に開催された提灯ウォーク (Lantern Walk) は14マイルを歩くものだが、ストラウド行政府長が来町し、ウォークの開会宣言をした。ダースレイの町長は、筆者たちの調査グループが訪問したさいに、タウン・ウォークと一緒に参加し、前町長もミーティングに同席した。ダースレイでは、WaW 活動に対して地域行政の関心が強く、積極的に支援していることがわかる。

4. ロス・オン・ワイ

ロス・オン・ワイ (以下ロス) は、人口約1万人の町である。グロスターやブリストルなどの近隣都市の通勤圏であり、住宅も比較的高くないため、若い人々も多く暮らし、現在も人口は増加傾向にある。同町は、ワイ谷で有名な豊かな自然環境に囲まれており、川や森、平野があるため、多様なフットパスが存在する。

2007年のWaW 協会設立当初からロスは同協会に入っている。ロスのWaW グループは、12人のメンバーで成り立っている。ロス WaW グループの現委員長は、WaW 協会の全国組織の

長も務めている。彼はゼロックス社の元技術者でアメリカに住んだ経験もある人物だが、地元ロスと地域のウォーキングに愛着をもっている。ロス WaW では、参加費は一人 3 ㄖとし、ウォーキング・フェスティバルをこれまでに 6 回開催してきた。ロスの町議会もこの WaW 活動を支援している。町長は WaW 委員長の幼なじみであり、地元で育った人々が核となり、町の商店を取り込んで、この活動を支えている。

ロスでは、ウォーキングに関係する住民は 100 名ほどいるという。現 WaW 委員長も町にある 2 つのウォーキング団体に所属している。WaW メンバーもウォーキング関連の団体に所属していることが多い。その 1 つである「ウォーキング・グループ」は、30 年前に設立され、ロスでは最も古いウォーキング団体である。この町には、全国組織のランブラーズ協会の地域支部であるランブラーズ・グループも存在し、週 2 回ウォークを開催している。こうしたウォーキング団体に所属する WaW メンバーの中には、ロスではウォーキングを通して自然環境を楽しむことができるため、ロスを選んで移住してきたという夫婦もいる。また、健康のためのウォーク (Walks for health) を実施するグループもあり、かれらは肉体的に病気や怪我など回復を試みる人々あるいは精神的な諸症状をもつ人々とともにウォーキングを奨励、実施する活動を行っている。

ロスの WaW 活動は、多様なウォークを開催し、ウォーキングを日常的に行う人々によって支えられているといえる。こうした人々は、同町長と WaW 委員長のように、幼い頃から町に住む友人同士の場合もあれば、地元の商店など地域に根づいた人々や移住者であってもウォーキングを通して知り合った人々などであり、ロス WaW にはかれらが協力して WaW タウンである同町を盛り上げようとする姿勢がみられた。

5. チェプストウ

ウェールズの北東部に位置するチェプスト

ウは、人口約 15,000 人の町である。同町は、国が指定する AONB の一つであるデーンの森 (Forest of Dean) に近く、ワイ川が流れる森もあり、セバーン川の河口に位置する。そのため、自然環境を楽しみながら歩くことのできる多くのフットパスに恵まれており、さらに古くからの交易地としての歴史を知ることのできるタウン・ウォークも充実している。また、町の近くには中世のティンターン大聖堂跡があり、多くの観光客が訪れている。

チェプストウの WaW 活動は、2012 年に町議会が町でウォーキングに関わっている有志数名にウォーキング・フェスティバルを開催するように依頼したことで始まった。そして、2013 年に初めてウォーキング・フェスティバルを開催したという。初年度は、160 人がウォークに参加し、1 日だけ開催した。2 年目は、200 人以上が参加し、2 日間開催した。そして、3 年目の 2015 年は 470 人が参加し、4 日間開催した。22 の異なるウォークと 4 つの工芸製作やワークショップも行われた。チェプストウのウォーキング・フェスティバルは、開始わずか 3 年で拡大し、町に恩恵をもたらしている。

チェプストウの WaW グループのメンバーは 7 人で、現委員長は元小学校教師の女性で、ランブラーズ協会にも所属している。メンバーの中には WaW 全国組織の委員会メンバーで、チェプストウでは健康のためのウォークを週 1 回開催する一方で、町が所有する庭や鉢にハーブを植える活動を行っている女性もいる。彼女はウォーキングのグループには入っていないが、WaW メンバー数名で旅行会社に依頼されて世界中から訪れたウォーカーを引率することが年に 3、4 回あるという。彼女は、元プリストル警察署員だが、現在はチェプストウから 4 マイル離れたところでホリディ・コテージを経営している。また、元セールスマンで、現在はボランティアで川沿いの谷を通るフットパスの維持管理を行っている男性や仕事の合間にボランティアで町からゴミをなくす活動をしている男性など、チェプストウの WaW グループはフツ

Mar. 2016

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興

トパスの維持や町の社会的活動に積極的に取り組む人々によって構成されている。

チェプストウ行政は、WaW活動に積極的な姿勢を示している。町長はまだ若いですが、コミュニティ意識を町の歴史や歴史的建築物を通して育むことに関心があり、町の歴史を歩いて学ぶヘリテージ・トレイルを含むウォーキングの促進とウォーカーの誘致による町の発展を目的としてWaW活動を支持している。チェプストウでは現在、町の中心部にある歴史的建築物を宿泊費の安いホステルとして開業するために改装している地元男性がいる。ホステルが開業すれば、ウォーカーをはじめ、多くの若者が町を訪れるとして、行政だけでなく、WaWグループも期待している。

また、元町長で陶芸家の男性は、町のヘリテージ・トレイルのために、多くの道標や案内板を陶板で作成し、2012年に完成後、陶板を使ったヘリテージ・トレイルが開始した。それらの陶板は、道路や建物の壁に埋め込まれており、町のあらゆるところで目にすることができる。彼は、ヘリテージ・トレイルだけでなく、チェプストウを起点とするウェールズの長距離海岸フットパス、同町を通るイングランドとウェールズにまたがるナショナル・トレイルであるオフアーズ・ダイク・パス(Offa's Dyke Path)を両方示す地図付きの案内板や道標も陶器で作成し、それらは川沿いに設置されている。

このように、チェプストウでは地元行政に携わる人々も積極的に行動し、フットパスに関わる活動に貢献している。ウォーカーを誘致するホステルの建設や歴史的建築物の修復、ヘリテージ・トレイルの完成など、町ぐるみでWaW活動を行っているといえる。

おわりに

本稿では、英国のWaW協会の設立経緯、WaWタウンの概念や認定基準、活動目的を把握し、さらにこれまでに認定されたWaWタウンの現状と活動について5つのWaWタウンの

事例を取り上げて述べてきた。

WaW概念発祥の地であり、最初のWaWタウンであるHBでは、観光市場ではなく、フットパスを活かしたウォーカー誘致という点でフェアトレード・タウンの概念を応用したことがわかった。さらに、それに賛同する市町村が英国各地から次々と参加を表明し、WaWタウンの認定を得て、2015年現在、2007年の協会発足から5倍にあたる116のWaWタウンが誕生している。このことから、英国では、現在とくに大きな産業もなく(過去に産業が隆盛した場合も多いが)、滞在する観光客も多くない地域においては、WaWタウン認定とWaW活動促進によるウォーカー誘致が地域の発展や再活性化への一つの方策として捉えられていると考えられる。

しかし、事例としてあげたWaWタウンの中には、観光客が少ないわけでも、人口が減少傾向でもない町があった。さらに、WaW活動への取り組み方もそれぞれ異なっていることがわかった。

HBでは、ここ5年ほどの間に観光客が急増したため、最初のWaWタウンとしての面影とWaW活動による発展は現在では見つけにくい。しかし、地域行政があまり機能していないため、人々の間では自治意識が強い。地域のグループやコミュニティと協力してまちづくりを推進したりフットパスの維持管理に関わる人々が、積極的にWaW活動を展開し、地域全体で再びWaWタウンとして発展するよう取り組んでいる。

ウィンチコムでは、2000年以降、停滞状態にあった町に対して、一住民が提示したWaW概念に行政が賛同、支援したことでWaW活動が始まり、現在では町全体でWaWタウンとしての認識が共有され、町が再活性化し成功している。

WaWタウンとして認定後間もないダースレイでは、行政の支持はあるが、商店や住民などコミュニティを取り込むイベントを開催することでWaW活動を拡大、周知しようとする努力

がみられた。

ロス は、人口が増加傾向にある町で、2007年当初からWaWタウンとなった。ロスでは、WaWメンバーにウォーキングを日常的に行う人々が多く、地元住民の古いつながりを活かして、そこに移住者やウォーキング仲間、商店主たちを取り込んで、行政の協力も得て、WaW活動が活発に展開されている。

ウェールズのチェプストウでは、行政からの依頼によって、ウォーキング・フェスティバルが2013年に開催され、WaW活動が本格化した。数年の間に参加者は3倍にのぼり、WaWタウンとして発展を続けている。WaWメンバーは、町で社会的活動に取り組む人が多く、フットパス維持にもボランティアとして取り組んできた人々である。行政関係者も実際に道標を作成したり、ヘリテージ・トレイルを完成させたりとWaW活動に実質的に貢献している。

HB、ウィンチコム、ロスのように住民主導でWaW活動が開始される町がある一方で、チェプストウのように行政主導で始まり、その後、住民・行政一体型(ダースレイ、ウィンチコム、ロス、チェプストウ)になっているWaWタウンもある。

一方で、共通点としては、各WaWタウンの活動グループのメンバーには、元公務員、元教師や元大学教員、医師、元技術者など知識階級の人々が核となって推進していることが明らかになった。彼らはいずれも周辺の自然環境を含めた自分たちの暮らす地域に対して愛着をもち、歩くことに対する熱意があり、それをフットパスの活用を通して実現しようとしている。

また、WaWメンバーには、当然、ウォーキングを好み、それを趣味や日課とする人々が多いが、WaW活動以前から取り組んでいる活動を継続したり、あるいは社会的活動をWaW活動と並行して実施している人々も多い。フットパスの維持管理をボランティアで行っていたり、町で社会的活動を実践したり、地域づくりの団体で活動したり、彼らは、自ら積極的に地域やコミュニティと関わろうとする人々であること

もわかった。

英国におけるフットパスと地域振興は、フットパスを活用した地域振興を目的とする行政と、それを意識せずに多様な社会的活動を行っていた熱意ある住民の活動がうまく融合したといえるのではないだろうか。自分たちなりに活動したら、結果的に地域が活性化した、ということかもしれない。しかし、前提として彼らの周りには豊かな自然・文化的環境に恵まれたフットパスの存在があることは言うまでもない。

【付 記】

本稿は、文部科学省科学研究費補助金(基盤B)研究課題「下からの地域開発の実践—フットパスと農村民泊による展開」(平成27年度採択 研究代表者 前川啓治)、同科学研究費補助金(基盤C)研究課題「英国のパブリック・フットパスをめぐる文化・社会的環境の構築に関する人類学的研究」(平成27年度採択 研究代表者 塩路有子)によって2015年8月に実施した調査の成果報告の一部である。

注

- 1) 本稿の内容は、主に2015年に実施した現地調査にもとづくが、2013年度阪南大学産業経済研究所助成研究(B)「観光まちづくりの展開に関するシステム論的研究」によって2013年9月に実施した調査結果も一部含む。
- 2) フェアトレード・タウン(Fairtrade Town)とは、発展途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することを旨とした「公平貿易証明」がなされた商品(フェアトレード製品)の利用を促進しているとして、公正貿易証明団体から認定された都市である。世界で初めてのフェアトレード・タウンは、2001年の英国ランカスター州ガースタン(Garstang)だった。ガースタンでの活動が評判になり、これに続く都市を増やすため、英国フェアトレード財団は「フェアトレード・タウンと認められるための基準」と「活動ガイドライン」を作成した。これにより、2001年から2006年の間にイギリスでフェアトレード財団からフェアトレード・タウンの認証を受けた町は、209に上った(ウィキペディア「フェアトレード・タウン」HP、2015年10月26日取得)。
- 3) フェアトレード・タウン計画における基本的な5つの条件は以下の通りである。
 - ①地域行政がフェアトレードを支援する決議を通す

Mar. 2016

英国におけるパブリック・フットパスと地域振興

こと。

- ②すくなくとも2つのフェアトレードの製品を地域の店やカフェ、食堂で提供できるよう準備しておくこと。
- ③フェアトレード製品は地元の多くの職場(不動産屋や美容院など)、コミュニティ組織(教会や学校など)で実際に使われること。
- ④メディアの関心を喚起し、キャンペーンを支援してもらうこと。
- ⑤地元のフェアトレード推進グループは、フェアトレード・タウンのステータスの継続的な保持を確実にするために集まること。
- 4) 全参加者28名の地域と団体は以下の通り(リスト記載順, 括弧は人数): Church Stretton Area Tourism Group (2), Otley Walking Festival (2), Otley Town Council (1), Ross on Wye RA (2), Barnard Castle RA (1), Teesdale Marketing Limited (1), Pentrefoelas Community Council (1), Menter Nant Conwy (1), Conwy (1), Todmorden (1), Penmaenmawr (2), Prestatyn (1), Great Malvern (2), Clitheroe (1), Heptonstall Parish Council (1), Talgarth Town Council (1), Natural England (1), Yorkshire Dales (1), Fair Trade Towns (1), Garstang (1), Hebden Bridge (3).
- 5) ランプラズ協会は、英国最大のウォーカーの権利を守るチャリティ団体である。
- 6) AONBは、国が指定する特別自然景観保護地域であり、イングランド、ウェールズ、北アイルランドに存在し、ナチュラル・イングランドなどの公的機関によって認定されている。AONBは、国立公園のように開発から保護される一方で、国立公園とは異なり独立した運営組織をもたず、そこでのレクリエーション活動も制限されている。
- 7) カルダーデール・ウェイ (Calderdale Way) は全長80 km (50 mile) に及ぶフットパスで、1978年に行政府 (Calderdale District Council) によって設定された西ヨークシャーの長距離フットパスである。WAGメンバーであるHB住民によると、当時、行政は、ルートにある石に生えている雑草の除去作業をボランティアに依頼し、同ルートを完成させたという。この他にも、HBには、数え切れないほど多くのフットパスとウォーキング・ルートが存在している。それらの中でも、歴史的に有名なものとしてPack Horse Trailと呼ばれる、18世紀の産業革命以前に丘の上近くをポニーが羊毛を運んだ道があり、そのルートには一部石畳が残っている。
- 8) 北部イングランドのフットパスの再開をめぐる地主と労働者の対立とは、1932年のキンダースコット事件である。ピーク・ディストリクトの入り口

に位置する湿地帯の丘キンダースコットの開放を求めてマンチェスターの労働者約400人が強行侵入し、数名が逮捕された。地主たちは、湿地での雷鳥を保護するという口実で労働者の立ち入りを禁止しようとしたが、当時、ハイキング・ブームもあり、ピーク・ディストリクトを散策して楽しんでいた北部の都市労働者の怒りをかった(平松1999: 166-168; 市村2000: 144-146)。

参考文献

- Bibby, Andrew, *All Our Own Work*, London: Merlin Press, 2015.
- 平松紘『イギリス緑の庶民物語：もうひとつの自然環境保全史』明石書店, 1999年。
- 平松紘『ウォーキング大国イギリス：フットパスを歩きながら自然を楽しむ』明石書店, 2002年。
- 市村操一『誰も知らなかった英国流ウォーキングの秘密』山と溪谷社, 2000年。